

有名歌セレクション

百人一首から選んだ有名歌10首

1番

秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ

【現代語訳】秋の田の仮庵は屋根の苫が粗いので、私の衣の袖は露に濡れ続けている
百人一首の冒頭歌。天智天皇の作とされ、秋の田の番小屋の質素な情景を詠む。

7番

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

【現代語訳】大空を遥かに振り仰いで見ると、春日にある三笠山に出ていたあの月と同じ月か
遣唐使・安倍仲麻呂が唐の地から故郷の三笠山を思って詠んだ望郷の歌。

9番

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

【現代語訳】花の色はむなしく色あせてしまった。長雨が降り続く間に、私の容色も衰えてしまった
六歌仙の一人・小野小町の代表歌。「ふる」「ながめ」の掛詞が有名。

13番

つくばねの峰より落つるみな川の川恋ぞつもりて淵となりぬる

【現代語訳】筑波山の峰から流れ落ちるみな川ののように、恋心が積もり積もって深い淵となった
陽成院の恋歌。筑波山から流れる川に恋心を重ねた。係り結び「ぞ...ぬる」の好例。

17番

ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

【現代語訳】神代の昔にも聞いたことがない。竜田川が紅葉で真紅に水をくくり染めにするとはい
在原業平の代表歌。枕詞「ちはやぶる」と竜田川の紅葉の鮮やかな描写で知られる。

33番

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

【現代語訳】のどかな光の春の日に、なぜ桜は落ち着きなく散り急ぐのだろうか
紀友則の春の歌。穏やかな春の日にあわただしく散る桜への問いかけ。

57番

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲がくれにし夜半の月かな

【現代語訳】めぐり逢って、見たのかどうかもわからないうちに雲に隠れた夜半の月のように
紫式部の歌。久しぶりの再会があまりに短く、雲に隠れる月のようだったと嘆く。

62番

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

【現代語訳】夜のうちに鶏の鳴き真似で人をだまそうとしても、逢坂の関は決して許しませんよ
清少納言の機知に富んだ歌。孟嘗君の故事を踏まえた知的な応答歌。

77番

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

【現代語訳】川の瀬が速いので岩にせき止められる滝川ののように、別れても最後にはきっと逢おうと思う
崇徳院の激しい恋歌。岩で分かれる川の流れに恋の運命を重ねた序詞の傑作。

87番

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

【現代語訳】にわか雨の露もまだ乾かない真木の葉に、霧が立ちのぼる秋の夕暮れ
寂蓮法師の秋の歌。にわか雨の後の情景を詠んだ、新古今調の繊細な一首。